

【問題認識】

学術誌委員長を務めて感じたこと

- 産学連携学会の知的生産について、
学会としての知的生産は十分なのか？

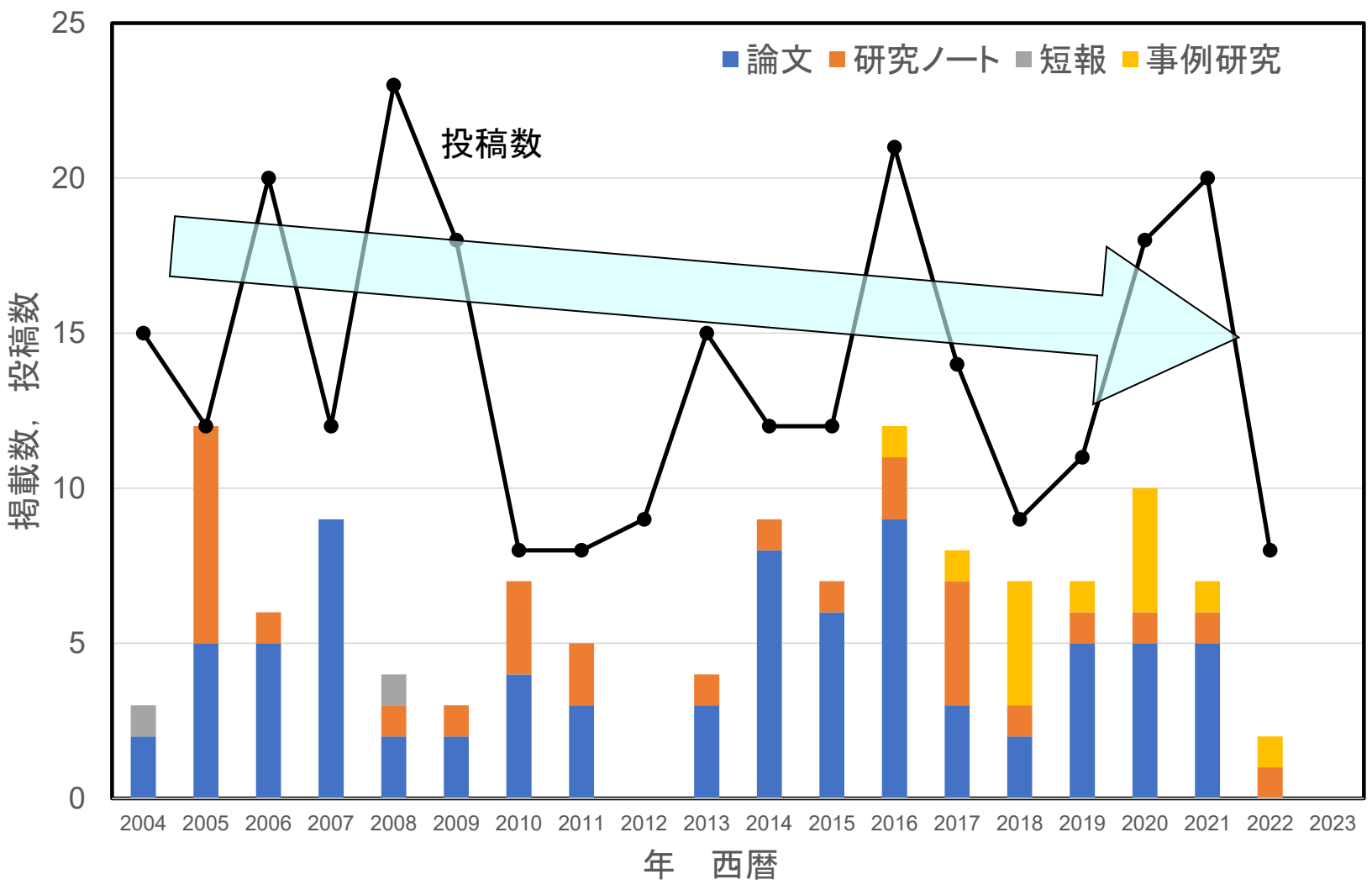
北村 寿宏

学術誌委員会 委員長
(島根大学 地域未来協創本部)

産学連携学会で 知の創造，蓄積，定着が 進んでいるのか？

- ・ **大会，支部会**：活動や研究成果を発表し，議論する。
⇒知を**創造**，**蓄積**する，議論し知を深める。
- ・ **シンポジウム，研究会**：テーマを掲げて議論する。
⇒知を**深める**。新しい課題や知が生まれる？
- ・ **学術誌（産学連携学）**：論文等として投稿し，査読を受けて検証され，論考（知）を**定着**させる。

論文等の投稿数の減少？



◎**大会，支部会**：毎回100件以上の発表があり，事例や知見の蓄積は進みつつある？

◎**シンポジウム，研究会**：シンポジウムで掲げられたテーマで，知の深掘りが進んでいる？

◎**学術誌（産学連携学）**：

- ・掲載された論文等の数は年平均で6.4件（19年で122件）で，決して多いとは言えない。
- ・投稿数も減少しているように思われる。
- ・掲載率は，平均すると46%である。

⇒**論考（知）の定着は進んでいるのか？**

論文等の投稿数と掲載数の増加に向けて

◆投稿が増えない要因

- ・大会での発表後に、議論して深掘りすることができていない。
- ・論文等として、まとめ上げる時間が無い。
- ・論文等が、会員の所属する組織での業績評価にならず、インセンティブが働かない。

◆掲載数が増えない要因

- ・投稿される論文の内容が、掲載可となるには不十分である。
 - ⇒議論を通して知の深掘りができない。
 - 議論する場が少ない(無い)。
 - ⇒議論できる仲間を見つける、
若手が気軽に議論できる場の提供が必要か？
- ・投稿される論文の書き方が、掲載可となるには不十分である。
 - ⇒論文執筆のスキルが不足している。
 - ⇒スキルアップのための助言ができる仕組みが必要か？

論点

- 産学連携学会としての知的生産は十分なのか？
- 他の学会の状況は？
- 論文等の投稿数と掲載数の増加に向けて学会としてできることは？

地方大学における産学連携や地域イノベーションの創出の促進に向けて

【問題認識】

地方大学の一つである島根大学で産学連携に携わり、大学と地元企業との連携、さらには地域イノベーションの創出がなかなか進まないという状況に直面している。

知の創出と活用という観点からも大きな問題ととらえられ、地域格差の拡大にもつながるように思われる。

北村 寿宏

島根大学 地域未来協創本部

【OS:産学連携・異】地方大学における企業との共同研究の現状

表 大学所在地県内企業との共同研究の数とその割合

大学	企業相手合計	所在地県内 大企業	所在地県内 中小企業	所在地県内 企業合計	所在地県内 割合(%)
弘前大学	161	8	36	44	27.33
宇都宮大学	409	18	139	157	38.39
新潟大学	452	31	84	115	25.44
富山大学	485	97	98	195	40.21
岐阜大学	714	15	180	195	27.31
三重大学	777	80	216	296	38.10
鳥取大学	544	3	189	192	35.29
島根大学	304	1	57	58	19.08
岡山大学	732	33	114	147	20.08
山口大学	683	154	63	217	31.77
香川大学	259	22	46	68	26.25
愛媛大学	374	43	61	104	27.81
高知大学	264	3	60	63	23.86
佐賀大学	262	0	30	30	11.45
長崎大学	430	13	72	85	19.77
大分大学	259	10	98	108	41.70
宮崎大学	323	12	42	54	16.72
北見工業大学	209	0	28	28	13.40
電気通信大学	549	147	136	283	51.55

(2009～2013年度の実績をもとに整理)

出典: 科研報告遺書「地域イノベーション創出に向けた地方大学における
産学共同研究の実状解明の実証的研究」 <http://www.sgrk.shimane-u.ac.jp/ACRA/>

◎地元企業との共研の特徴

- ・地元割合は高くない
- ・相手先は**中小企業**が多い

地元企業との共同研究の継続性（島根大学の例）

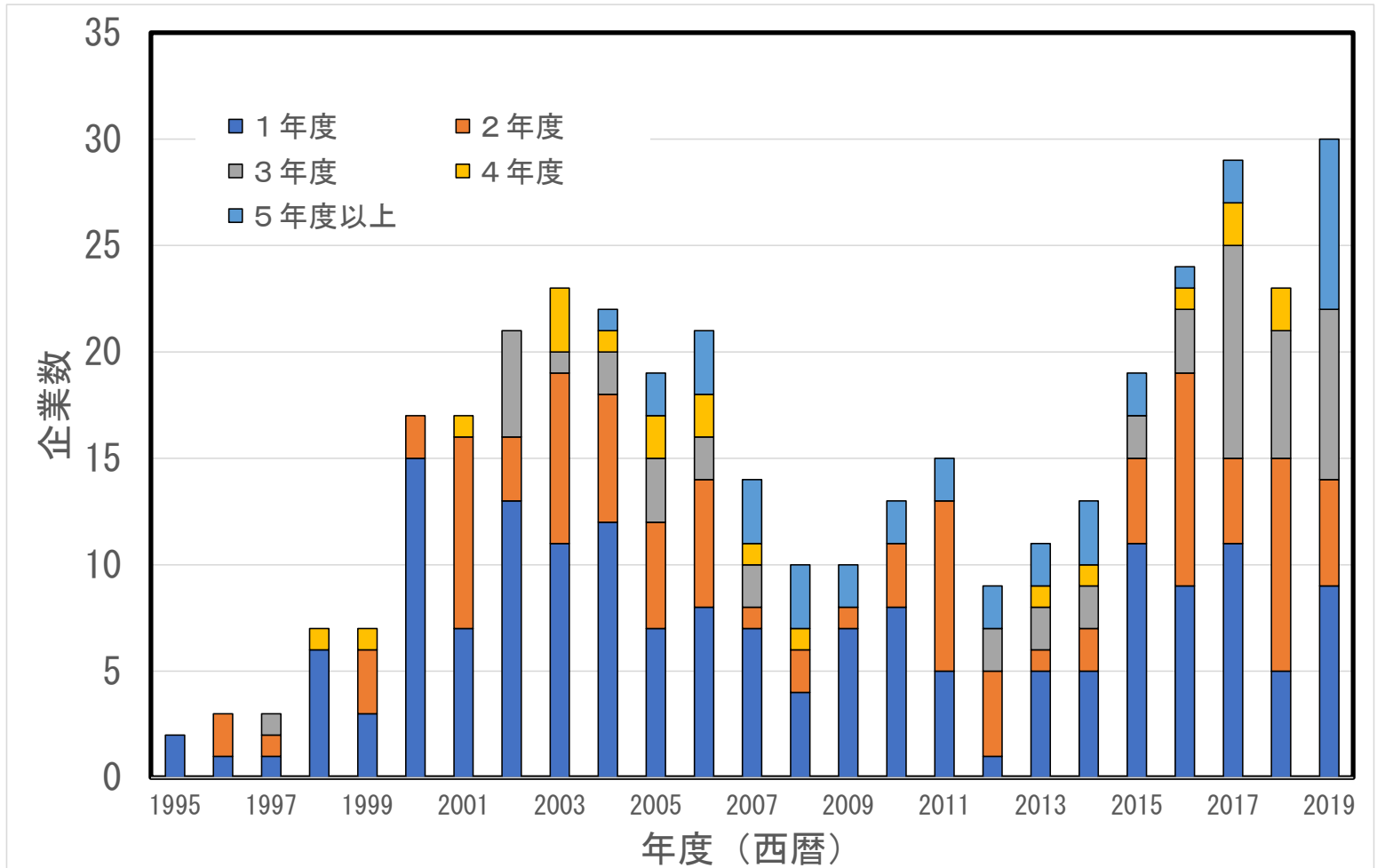
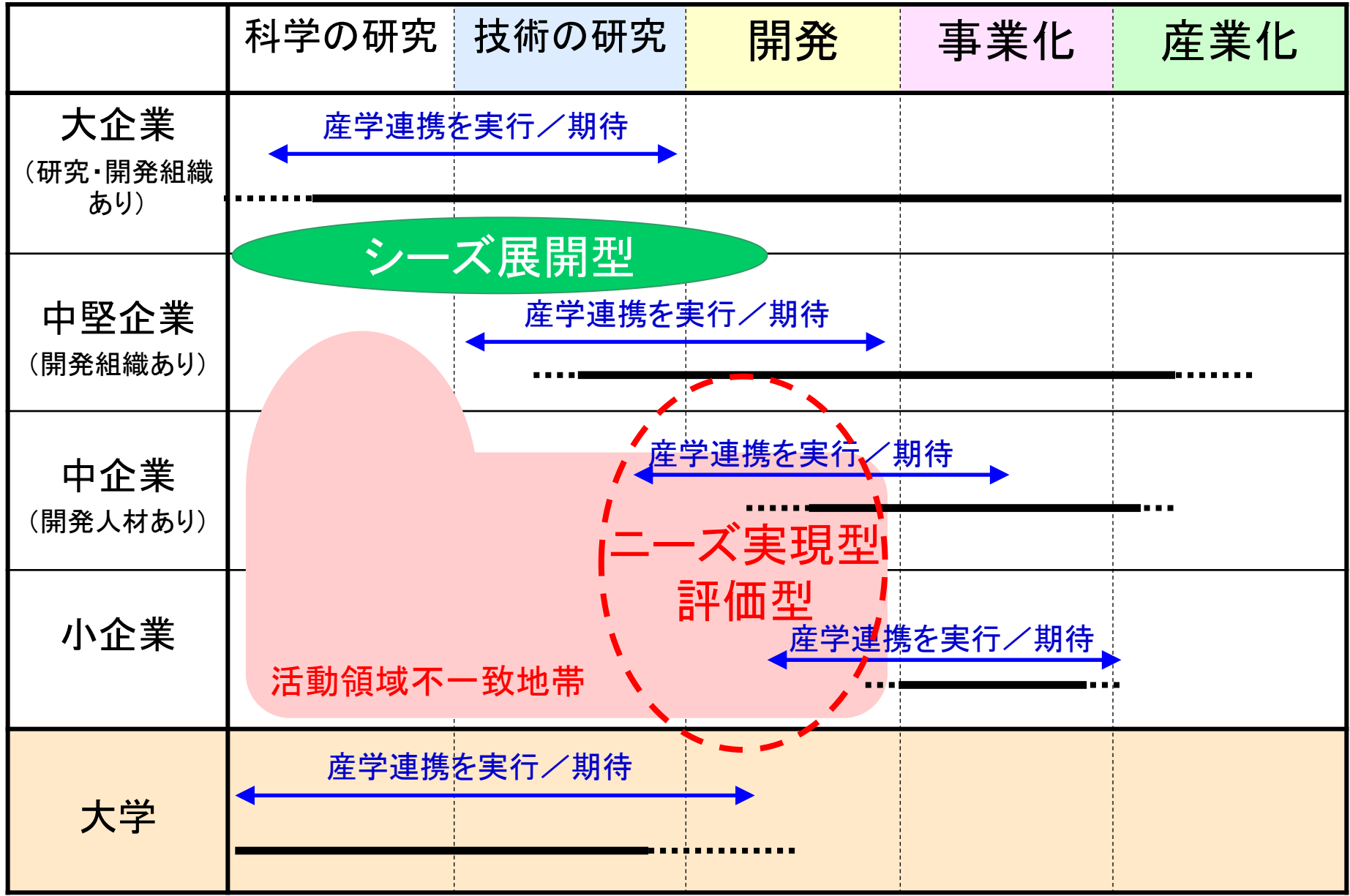


図 契約継続年度数別の企業数の推移

- ・多くの企業では、1回1～2年程度の共同研究で終わり、継続して共同研究が実施されるケースは多くない。
 (新潟大学や長崎大学でも同様の傾向が見られている)



(..... : 主な活動範囲を示している)

◎課題

- ・企業の研究・開発力の向上
- ・大学の技術成熟度を高める取り組み
- ・ギャップを埋める仕組み作り

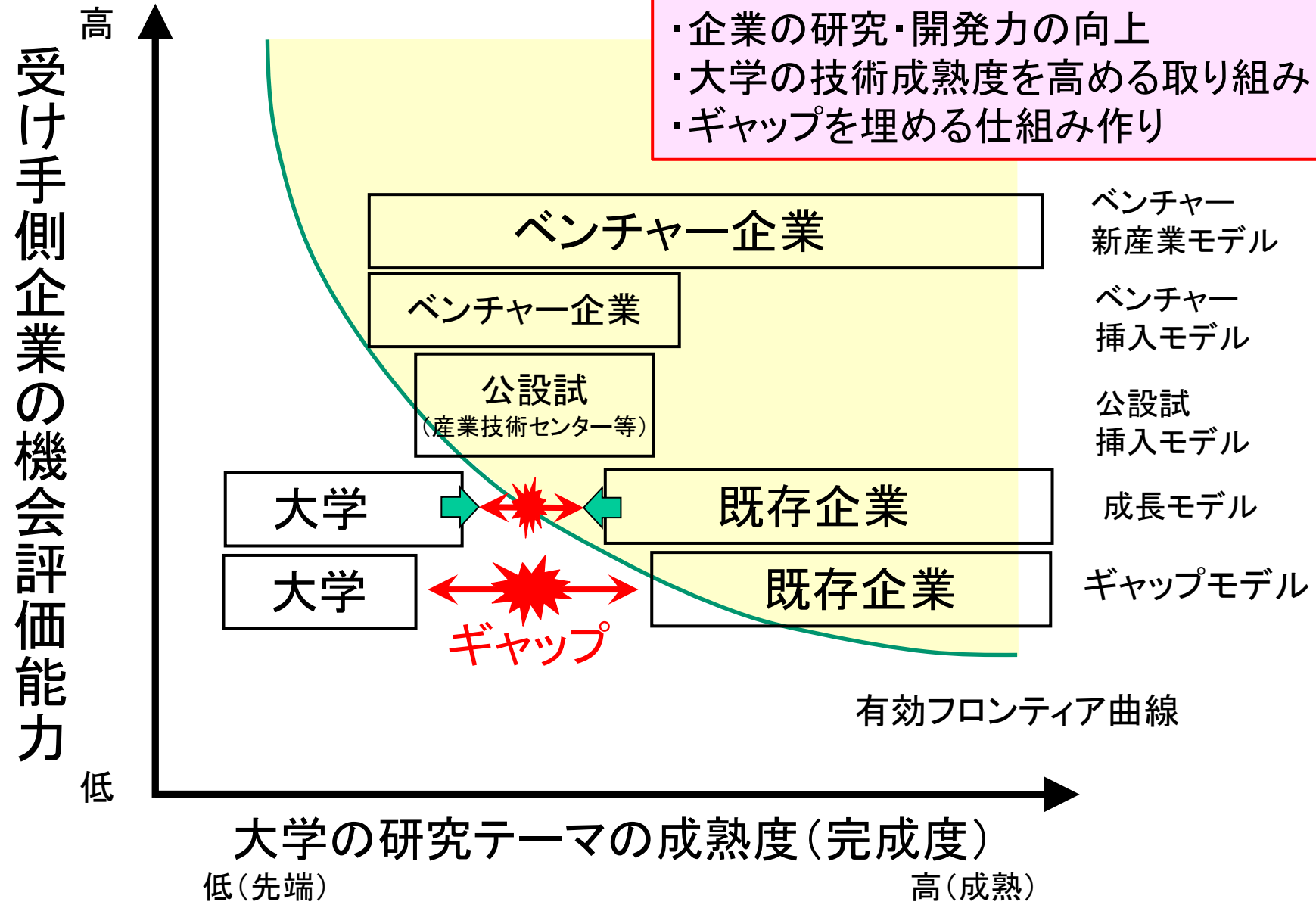


図 技術有効フロンティア曲線

論点

このような現状を踏まえて、

- ・ 地方におけるイノベーション創出を促進していくためには？

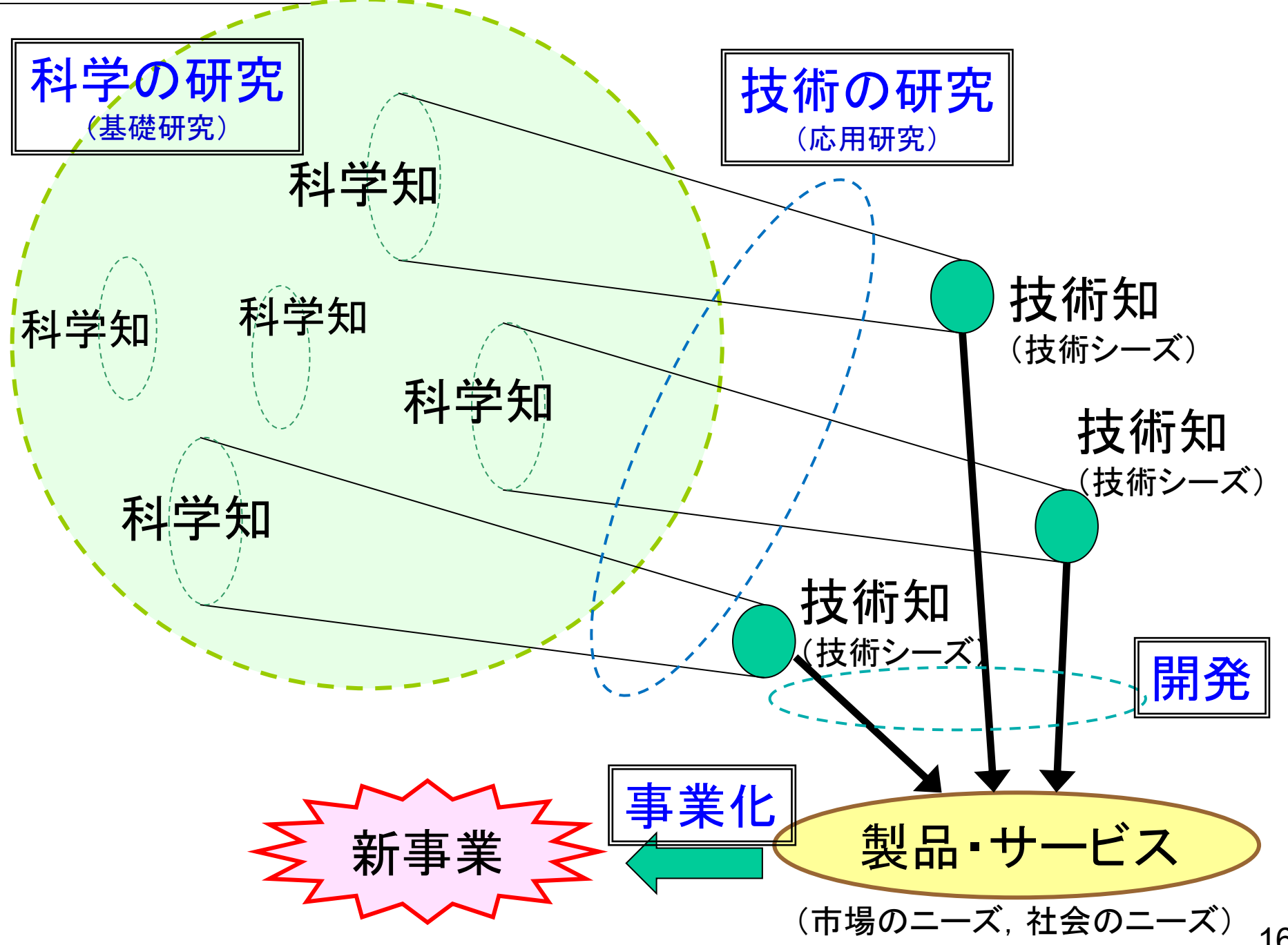
(継続した共同研究を行い、新製品や新事業の創出に結びつけていくためには？)

- ・ そのための産学連携学会の役割は？

付録スライド

産学連携学

産学連携学は、異種異質連携で生産された知を社会に役立てるために行うプロセス（知の生産から活用まで）についてを対象とした学問？



科学の研究
(基礎研究)

技術の研究
(応用研究)

科学知

科学知

科学知

科学知

科学知

技術知
(技術シーズ)

技術知
(技術シーズ)

技術知
(技術シーズ)

開発

事業化

新事業

製品・サービス

(市場のニーズ, 社会のニーズ)

技術の研究

様々な技術シーズを創り出す作業

科学知

シーズ探索・提案型

開発

真に必要な技術シーズを選択して製品を作り上げる作業

必要な技術シーズ
(技術知)

ニーズ=シーズマッチング型

科学の
研究

様々な技術シーズ
(技術知)の創造
(社会のニーズ)

なぜ?を知りたい
評価したい

ターゲット
(製品やサービス,
製造プロセス)
(市場のニーズ)

図 研究と開発のベクトルの違い

